★現場ルポ

出荷をずらして貴重品に
一工夫で農作物の付加価値高める

今回訪ねた浜松市北区のブルーベリー農園「アンガハルサー」の安間耕司氏は、農園主としては少し変わった経歴の持ち主。24歳から5年ほど、石垣島でジェラートショップを運営していた。その際、「農協などに出荷できない傷のある果物を農家さんからもらっていた」経験から、2010年、心機一転、生まれ故郷に戻り、無駄の出ない農業を目指し始めた。最初はジャガイモで勉強したものの、考えた末、やはりジェラートの経験を活かせる「フルーツをやろう」と決め、現在は、イチジク、レモン、クランベリー、そしてブルーベリーを作っている。

施設概要

名　　称：ブルーベリー農園「アンガハルサー」
　　安間食料品店株式会社
場　　所：静岡県浜松市北区都田町9151-1
施設面積：施設栽培 北ハウス13a、南ハウス17a、
　　合計30a（3,000m²）
　　ブルーベリー園全体では87a（浜松地
　　域最大規模、約5,000本栽培）
設　　備：環境統合制御テヌート「コンダクター」、
　　暖房NEPON「ハウスカオンキ27」等

アンガハルサー農園主の
安間耕司氏

みかん産地でブルーベリー

安間氏の所属する丸浜柑橘農業協同組合連合会は、地域の名産品であるみかんを販売する農協。近くには『三ケ日みかん』いうブランドみかんもある。浜松は温暖な土地だが、みかん園は冬場には重油で暖房しており、重油が高騰した折に採算が合わなくなり、重油の消費量が少ない作物を探し始めた。そしてたどり着いたのがブルーベリーだ。「丸浜柑橘農協には5人のブルーベリーの先輩がいて、みんなハウスみかんからの転作の方。この方々に1から教えてもらい、なんとか目処が立ちそうになって独立した」。

新規就農者の安間氏は、もともとあったハウスを地主さんから借り受け、少し手直しをして2013年からブルーベリー栽培を始めた。

他産地のブルーベリーでは6～9月の夏場がメインだが、浜松では日照時間も長く暖かい気候のため露地栽培でも5月から採れ、それをさらに加温して季節コントロールすることにより2月頃から収穫を始めることができる。

安間氏のところでは、加温するハウスとしないハウス、屋根だけあるハウス、ネットで囲んだだけのほぼ露地栽培、の4種類の農園で品種構成を工夫し、2月～7月に収穫できるようにしているという。

CO_2施用への目覚め

4年前、安間氏はまずハウス環境をモニタリングするためにテヌートの『ブレス』を入れ、ハウス環境をデータとして見ることを始めた。

「農業新聞を見ると、他の作物はCO_2施用を当たり前のようにやっているのに自分のブルーベリーはハウスの環境すら見ていない。自分は興味があったので、モニタリングから始めてみた。すると、夜中のうちは呼吸でCO_2を出すため朝は900ppmなどCO_2濃度が高いが、そこから一気に300ppmなどに落ちる。やはり生きているとCO₂が必要なのだと感じた」。

さらに、補助事業で19年にはテヌートの『コンダクター』を採用。本格的に複合環境制御に取り組み始めた。

施用はCO_2を送るホースの先に多孔質の黒い管を繋げ、ガスの圧力でCO_2がジワーッと出てくる仕組み。葉の裏側にCO_2を効率よく当てるため、管をなるべく株元に置き、上昇気流に乗せて上に運ばせる。センサーで濃度を検知し、550ppm以下になると自動的に信号を送っ

1粒ずつ熟すブルーベリーは
1粒ずつ丁寧に手摘みされ、
パックに詰め梱包される